

『大草原の小さな家』の異文化コミュニケーション論的考察

山 田 健 太 郎

Aspects of Intercultural Communication in *the Little House on the Prairie*

Kentaro YAMADA

Abstract

In an attempt to explore the validity of literary text as well as literary reading for teaching intercultural communication, this paper analyzes *the Little House on the Prairie* in relation to a developmental model proposed by Milton J. Bennett. Of six stages in the model, aspects of Denial, Defense, Acceptance, and Adaptation were observed. It is noteworthy that such diverse responses to a different culture are described in this book written for children. It is suggested that, with proper instruction, this novel could serve as a suitable textbook to teach intercultural communication.

Keywords: Intercultural Communication, Literature, Denial, Defense, Acceptance, Adaptation

はじめに

本研究では、文学の有用性に関する研究の一環として、コミュニケーションと文学の関連性、とりわけ異文化コミュニケーション教育との関連での文学の有用性についての考察を行う。その出発点として、『大草原の小さな家』における異文化体験の表象を異文化コミュニケーションの理論的枠組みと結びつける試みを行う。

文学と教育については、数多くではないがいくつかのすぐれた研究がなされている。英米文学に限っても、最近ではクリスティーナ・ヴィッシャー・ブランズが、先行研究を参照しながら本格的な考察を行っている(Bruns)。また、日本の英米文学について言えば、英語教育と関連する研究が最近10年間ほどの間に興隆を見せている。具体例として、『英語教育』2004年10月号の特集「英語教育に文学を！」、吉村俊子・安田優ほか編『文学教材実践ハンドブック』、高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』などをあげることができよう。高橋が指摘しているように、イギリス・アメリカを中心に展開する英語教育では、文学教材がオーセンティックな英語教材としてかなり有効利用されていることがわかる(60-66)。今後この分野の研究がすすんで、日本の英語教育がより良いものになることが期待されることである。

一方、異文化コミュニケーションとの関連での文学研究、あるいは異文化コミュニケーションの文学研究は、まだ本格的な成果がないのが現状である。最近になって、ヨーロッパでマイケル・バイラムを中心に言語教育における文化の重要性が主張される中で、言語教育と異文化コミュニケーションを合わせた研究の中に文学が取り入れられた例がいくつか散見される。マイケル・バイラムとマイケル・フレミングによる、演劇を取り入れた異文化コミュニケーションと言語学習についての研究を集約した論文集や(Byram & Fleming), エヴァ・ブルウィッツ-メルザーの研究などが例としてあげられよう(Burwitz-Melzer)。一方、日本の異文化コミュニケーション研究では文学を本格的に扱ったものと言えるものは、青木順子による文学作品を異文化コミュニケーションの観点から論じたものくらいである。日本コミュニケーション学会が40周年を記念して出版した『現代日本のコミュニケーション研究』の、「異文化コミュニケーション」の章やコミュニケーション教育に関する章で、異文化コミュニケーションとの関連で文学に言及したところはなく、異文化コミュニケーションの入門的な『よくわかる異文化コミュニケーション』には文学と関連する項目が目次にも巻末の索引にもない。また『異文化コミュニケーション事典』でも、「現代および近未来の異文化コミュニケーションの研究・教育と実践に必要不可欠と思われる総数727の重要項目」には(ii), 「文学」に関連したものは「翻訳と通訳」の範疇にある「文学翻訳」だけであり(319-20)、巻末の索引には「文学」の表現がまったくない。

しかしながら、異文化コミュニケーションでしばしば問題の起因とされるステレオタイプは、人の容貌から宗教や生活習慣、さらにコミュニケーション・スタイルなど様々な形で表れる文化が、認識されイメージ形成される過程で起こるものであること、また一方、文字をイメージ化する読者体験を通じて、自らの視点を移動させ拡張するのが文学の醍醐味であり、さらにまた自らの価値観をも批評の対象とするのが文学的考察の特徴であることを考えれば、異文化コミュニケーションと文学の相互関連性について研究する意義は大いにあるのではないかと考える。

以上のような状況において、文学と異文化コミュニケーションの関連性についての試論を進めるにあたり、まずは異文化コミュニケーション能力の研究体系を参照して、研究の出発点とするモデルを検討しておこう。スピッツバーグとシャノンは、異文化コミュニケーション能力に関する研究をかなり網羅的に参照し、それらをその理論的特徴から5つに分類している。ここでごく簡単に紹介をしておくと、「構成モデル」(Compositional Models), 「相互志向性モデル」(Co-orientational Models), 「発展モデル」(Developmental Models), 「適応モデル」(Adaptational Model), 「因果経路モデル」(Causal Path Models)である。「構成モデル」は、異文化コミュニケーション能力を構成する要素を仮説的に分類したモデルである。研究者によって多少異なるが、「態度」(Attitudes), 「知識」(Knowledge), 「技術」(Skills)などをキーワードとしている(10-15)。「相互志向性モデル」は、異文化コミュニケーションの場面において、もっとも最適な成果をあげるという目標設定の中で、コミュニケーション当事者間の動きを念頭に、関連する要素を配置したモデルである(15-21)。「発展モデル」は異文化コミュニケーション能力の習得に焦点を当てたもので、もっとも低い段階から高度な能力を持つ段階までを示したものである(21-24)。「適応モデル」は、「構成モデル」に異文化コミュニケーションの場面の当事者間の動きを加えたものである。その意味で「相互志向モデル」とも似た点がある。そして、当事者が状況に適応していくプロセスを描き出そうとしている点にその特徴がある(24-29)。「因果経路モデル」は、異文化コミュニケーション能力を構成する要素がお互いにどのような影響関係にあるかを描き出そうとしたモデルである(29-34)。

本研究では、「発展モデル」の1つとして紹介されているミルトン・N・ベネットの理論を取り上げ、そのモデルで示されている発展段階に結びつける形で『大草原の小さな家』について考

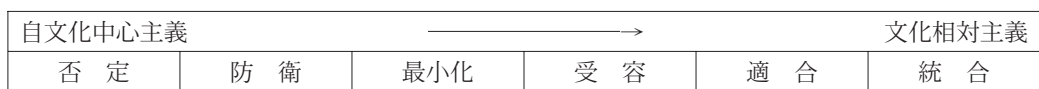
察をすることにする。ベネットの発展モデルをこの研究に採用するのは、異文化コミュニケーションの教育の文学との関連性という、これまであまり考察されていない領域についての論考を始めるにあたり、発展段階の指標が6つのカテゴリーで明示されるこのモデルが適しているからである。また、このモデルは主体が文化を認識することを中心に組み立ててあり、それゆえに文学をはじめとする表象文化論においてしばしば議論されるステレオタイプや他者イメージの問題を解決する具体的な道筋を示しているからである。

ベネットの異文化コミュニケーション・モデル

ミルトン・N・ベネットは、彼の異文化コミュニケーション理論の立脚点を構築主義的(Constructivist)世界観に置いている。とりわけ、文化について論じる際に本質主義的な(Positivist)立場ではなく、構築主義的な立場から文化観をもつことの重要性を主張する(Bennet 23-50)。ごく簡単に言ってしまうと、日本文化やアメリカ文化といったものは、確固たる事実・現実として存在しているものではなく、人々の認識の中で構築されているに過ぎない。こうしたことを理解できることが、高い異文化コミュニケーション能力を身につける上で重要だということである。こうした本質主義的考え方は、しばしば特定の文化グループの一般的傾向からステレオタイプを作り出す発想とも結びつく(54-58)。

さらに、異文化コミュニケーションの問題は、しばしば自文化中心主義的(ethnocentric)考え方に起因することを、具体例をあげて指摘している(62-78)。

ベネットによれば、最適な異文化コミュニケーションを成立させるためには、構築主義的に立ち、自分のものの見方が多様な世界観の1つに過ぎないということを確認し、その上で共感(empathy)も働かせながら相手のものの見方に立てるようになることが必要となる。ベネットは、これを自文化中心主義から文化相対主義(Ethnorelativism)への6つの段階、すなわち「否定」(Denial)、「防衛」(Defense)、「最小化」(Minimization)、「受容」(Acceptance)、「適合」(Adaptation)、「統合」(Integration)の6つの段階からなる発展モデルとして示している(83-103)。図解すると以下ようになる。



(Bennet 88, 一部改変)

図1 ベネットの発展モデル

「否定」は異文化適応の発展段階でもっとも自文化中心主義的なものである。この段階にある主体は、自らの文化のみが現実であり、これとは異なる価値体系の存在を認識しない(88-89)。「防衛」は、自らの文化以外の価値があることを認識するが、あくまでも自分の文化が優れた、もしくは正統で自然なものと考え、ほかの文化を2次的な価値のものにとらえる段階である(89-90)。「最小化」は、文化の違いについての意識を最小限に抑える段階である。この段階に入ると、主体は文化を普遍的な価値体系の中に置こうとする。文化の違いよりも共通性を上位にあるものとし、文化の違いは同質性の中のタイプやスタイルの種類としてとらえようとする。ただし、その普遍的な価値というのは自文化の延長先にあるもので、その意味において自文化中心主義の域を脱したのではない(91-92)。「受容」の段階になると、主体は自らの文化を相対的にとらえ、

様々な世界観の一つとしてみなすことができる。文化の違いについても十分認識できる一方で、どの文化も同等なものを受け入れることができる(94-95)。「適合」の段階では、主体は自分とは異なる文化を、その文化に生まれ育ったものと同じように受け取ることができ、その文化にふさわしい感じ方や振る舞いが自然にできるようになる。ただし、自らの価値観を捨てて新しい文化を受け入れるのではなく、みずからの信念や考え方を適応させる中で別の文化の価値をとらえる(95-96)。「統合」の段階に入ると、主体は文化的世界観をある程度自在に切り替えることができる。日常生活の中で状況に合わせて行動様式を切り替えるように、文化によって異なる価値観を切り替えるのである。もちろん日常の行動様式の切り替えは、ある程度その文化の中でほとんど無意識のうちに習得するものであるが、この文化的世界観の切り替えは、意識的な学習により自らの視野を拡張することで達成される(98)。

ベネットがこれらの「段階」もまた構築主義的な概念であると述べているように(87)、段階ごとの境界線が明確に設定してあるわけではないが、異文化コミュニケーションの視点からの文学作品評価の試みとして、このモデルにそって『大草原の小さな家』に描かれる文化的価値観や異文化体験、あるいは文化表象を考察してみよう。

『大草原の小さな家』にみる異文化コミュニケーション

『大草原の小さな家』は1870年頃のアメリカ開拓地の生活を描いた児童文学である。作家と同名のローラを主人公として、父親のチャールズ、母親のキャロライン、姉のメアリー、妹のキャリーと番犬ジャックからなるインガルズ一家が、インディアン・テリトリーでの開拓をめざし、1年ほど住んだ時の半自伝的な物語である。ヨーロッパ中心主義的文化の西部開拓地に進む人々と、インディアン・テリトリー周辺で生活するネイティブ・アメリカンとの異文化接触が様々な形で描かれている。

ここでは、ミルトン・N・ベネットの異文化コミュニケーションの発展モデルのカテゴリーに沿って、この作品に異文化コミュニケーションにかかわる要素がどのように見られるかを確認することで、異文化コミュニケーション教育の教材としての可能性について検討したい。

「否定」

異文化の存在を認めないこの段階とはどのようなものであるか。異文化が描かれる作品への適用がなかなか難しい問題であるが、ここではとりあえず異なる人種・エスニティーの人々を同じ人間として認めない態度をこれに含めることにする。『大草原の小さな家』において、ネイティブ・アメリカンはしばしば「野蛮人」として描かれる。ヨーロッパ中心主義の世界観において「文明」の領域外に存在する人々とする考え方である。その世界観を端的に示している例として、作品の冒頭でローラの父親チャールズが、インディアン・テリトリーのことを語る際に "there were no settlers. Only Indians lived there(2)."と話す場面があげられよう。ここでは、開拓地に住む人々とネイティブ・アメリカンがはっきりと差別されている構造が読み取れる。

ローラやメアリーが好奇心から父親に、ネイティブ・アメリカンの子供を見たいとしきりに作中で言う際に "papoose" という言葉を使うことにもその価値観が表れている。それはこれがローラたちの鹿の子 (fawn) を見たいという好奇心の延長であることが描かれることで明確に示されている。

「野蛮人」イメージは、はじめてネイティブ・アメリカンがローラたちの家にやってきた場面でも濃厚に描きこまれている。

Their faces were bold and fierce and terrible. Their black eyes glittered. High on their foreheads and above their ears where hair grows, these wild men had no hair. . . The Indian made two short, harsh sounds in his throat. The other Indian made one sound, like "Hah!" (139-40)

凶暴で恐ろしい表情として描かれるネイティブ・インディアンは文字通り「野蛮人」として描かれている。目はきらぎらと光り、異様な姿である。この引用の前では "naked wild men" (裸の野生人) とも言及されている(137)。そしてこの引用部分の最後では、彼らは言葉話すのではなく、意味不明の叫び声を発したと書かれている。あたかも彼らは言語を持たないかのような描写である。もちろんローラにとってその言葉が理解できなかったという可能性もあるであろうが、ローラたちとはかけ離れた存在であることが強調されていると言えよう。この場面では、彼らが腰に纏っているスカルクの毛皮が放つ悪臭(137)が違和感をさらに強調している。

「弁護」

ヨーロッパ中心主義的な価値観を幾分批判しながら書かれたと思われるこの作品には、異文化を意識しながら自文化の優位を疑わないこの段階の事例が数多く作品中に見られる。もっとも典型的と言えるのは、スコット夫妻であろう。彼らはインディアン・テリトリーもやがてアメリカの国民が開拓を許される土地となることを期待してやってきたのであるが、その考えを明確に表す形で、第17章でスコット夫人が、インディアンとの条約などを結ぶ必要などなく、土地を有効に耕す自分たちのような者たちが所有するのが正しいと主張し、しまいには「まともなインディアンは死んだインディアンだけだ」とまで言う(211)。この差別的な発言は、スコット氏によって第22章で繰り返される(284)。ただし、これらの考え方は、スコット夫人がマラリアの原因が小川の近くで豊かに実る西瓜を食べたからだとする頑迷な態度(192-94)や、井戸にろうそくを下してガスの発生がないかを確かめるチャールズの用心を無視するスコット氏の態度(153-57)など、作品の中でかたくなな心的態度と結び付けられて否定的に表象されていることは注目しておくべきであろう。

ここまで極端な反感を持ってはいないが、領土についてネイティブ・アメリカンに同等の立場を認めない考え方をもっているという意味では、インガルズ家のチャールズやキャロラインも同類である。チャールズがインディアン・テリトリーに移住することを決心した動機は、やはり同様の期待をしてのことであった。このことがやや批判的な意味合いを含みながら印象的に表現されるのが、「青いジュニアタ」という歌をキャロラインが歌うのをローラが聞く場面である。長い一日が終わり、子供たちもベッドに入ったところで、いつものようにチャールズがバイオリンで大衆音楽を弾き、この日はキャロラインが珍しくそれに合わせて歌う。しかしながら、歌詞の内容は、ネイティブ・アメリカンをロマンティックに讃えたものであり、終わりは "Fleeting years have borne away the voice of Alfarata. Still flow the waters of the blue Juniata (235)."となる。これを聞いていたローラが「アルファラタの声はどこにいったの」(235)と聞く。自らの立場を弁護するのを感じてチャールズは、ネイティブ・アメリカンは西部へと追いやられる運命にあり、それで自分たちは早く良い土地を手に入れられるようにと考えて、現在はインディアン・テリトリーであるこの場所に来たのだと説明する(237-38)。この場面では、ローラがさらに「インディアンの人たちは腹を立てないの」(238)と尋ねることで、この「弁護」的な立場は作品の中でやや批判的に描出されている。

「最小化」

この段階では、主体が自分とは異なる文化を認識し、それを普遍的な価値のもとで自文化と並行に存在するものとして理解しようとする。この作品で言えば、ネイティブ・アメリカンも同じ人間であると描かれている部分が、このカテゴリーに入ると考えられよう。

最も典型的なものは第18章 "The Tall Indian" から現れる、オセイジ族のソルダット・デュ・シェーヌ (Soldat du Chêne) をめぐるエピソード、特にそこで描かれるチャールズの考え方である。インガルズ家のドア口にある日突然現れたソルダット・デュ・シェーヌ (この時点では名前が出てこない) に、キャロラインは驚きの声をあげ、ジャックは飛びかかろうとするが、ジャックを制したチャールズは、インディアン式の挨拶をかかず、そしてキャロラインが用意した食事を終えると、チャールズが勧めたタバコを二人でしずかに味わう。さらにソルダットがチャールズにフランス語らしき言葉で話しかけると、チャールズが「話せない」と答え、しばらくしてソルダットは立ち去る(227-29)。ここでは同じ人間同士という考え方が強調されている。

同様の見方は、近くにパンサーが現れて、家族を守るためにパンサーを撃ちに出かけたチャールズが、同様に家族のことを案じたネイティブ・アメリカンから、すでに退治したと聞いたエピソードにも読み取れよう(262)。ここでチャールズとそのネイティブ・アメリカンは、人間の親として同等の存在として表象されている。

第14章の "Indian Camp" でも、インガルズ家の生活とキャンプで暮らしていたネイティブ・アメリカンの生活との共通性が強調される。チャールズがローラとメアリーを連れて行ったネイティブ・アメリカンのキャンプ跡の描写は、テントのポールを立てた穴の跡、飼い犬の食べ散らかした骨、移動に使う馬が食べて短くなった草と続く(175)。インガルズ家が開拓地で必要となる家と番犬と馬を所有しているのと同じ生活を、ネイティブ・アメリカンもしている事が示唆されている。さらにチャールズがローラとメアリーに、残された骨から鍋の中で調理されたのは何かと尋ねると、即座に二人は「ウサギ!」と答える(177)。ローラとメアリーが、共通する食生活を通じてネイティブ・アメリカンと文化的に近いものとして描かれる印象的な場面である。さらに、ネイティブ・アメリカンが装飾に使っているビーズがたくさん落ちているのをローラとメアリーは見つけ、拾って帰ると首飾りにして楽しむ(177-81)。ここでも、インガルズ家とそこで暮らしていたネイティブ・アメリカンは同じ人間であることが強調されている。文化の違いは最小化されていると言える。

「受容」

開拓時代の白人家族とネイティブ・アメリカンが主な登場人物となる物語であるので、長い時を共に過ごすような異文化体験は考えにくい。そうした作品背景では、「受容」段階まで進んだ異文化に対する態度を見つけることはなかなか難しい。一つそれに近いものを取り上げるとすれば、第24章で去りゆくネイティブ・アメリカンを見送るローラがある。

直前の章で描かれるけたたましい叫び声のネイティブ・アメリカンの戦いの集会が終わり、平穏な生活がインガルズ家に再びもたらされたが、一方ネイティブ・アメリカンたちはインディアン・テリトリーから去ることになる。インガルズ家を含む開拓者たちの命を救ってくれたオセイジ族の去り行く厳かな姿を見送る場面で、ローラは子どもたちの姿に共感を覚える。

The women and children came riding behind the Indian men. Little naked brown Indians, no bigger than Mary and Laura, were riding the pretty ponies. The ponies did not have to wear bridles or saddles, and the little Indians did

not have to wear clothes. All their skin was out in the fresh air and the sunshine. . . Laura looked and looked at the Indian children, and they looked at her. She had a naughty wish to be a little Indian girl(306-7).

この瞬間ローラは、自らがネイティブ・アメリカンとなることを想像している。強い共感を覚えていることは、ネイティブ・アメリカンの子どもと視線を結びあわせることでも強調されている。もちろんその感情を「悪い」と表現していることから、完全にその価値観の世界を自分のものとしたというものではない。むしろこれは、ネイティブ・アメリカンの文化全体への憧れというよりも自由に憧れるローラの感情が変容したものとも考えられるし、その背景には、社会の強い抑圧を感じていた作家ローラ・インガルズ・ワイルダーの自由への想いがあることは容易に読み取れることである。とはいえ、一方でネイティブ・アメリカンへの強い拒絶感が表現されているこの作品の中で、ネイティブ・アメリカンとの一体感を描く部分があること、しかもそれが主人公のローラの境地であることは、注目に値しよう。

おわりに

以上、ベネットの発展モデルを参照しながら『大草原の小さな家』における異文化コミュニケーション的要素について考察してきた。6段階のうち、「適応」や「統合」に相当する異文化への態度はこの作品に見つけることはできなかった。小説は現実感がその経験を豊かなものとする上で欠かせないこと、また一方、現実的にはこの段階まで進んだ異文化コミュニケーションが今日でも多くないゆえにこうしたモデルが創案されていること、これらを踏まえた上でこの作品背景を考えれば、それはある程度当然のことと言えよう。しかしながら、児童文学で、しかも決して長くはない一つの作品の中に、多様な異文化コミュニケーションの、少なくとも4段階までが書き込まれており、同時により上の段階を目指す価値観が明確に読み取れることが、以上の議論である程度確認できたのではないかと思う。

しかしながら、文学の異文化コミュニケーション教育との関連性についての考察という意味では、ここで確認したのは、文学作品の中には異文化コミュニケーション的要素が豊富に描かれているということに過ぎない。たとえばベネットのモデルに沿って考えた場合に、「適応」や「統合」の段階を表象している作品はあるのか、あるいは書かれる可能性はあるのかについては、広い範囲の作品を検討していく作業が必要であろう。また、多様な異文化コミュニケーションが描かれた作品が数多く見出せたとして、それらをどのように実際の異文化コミュニケーション教育に利用することができるのか、その有効性はどの程度なのか、についても明らかにしていく必要がある。これらについては今後の課題である。

引用資料

1次資料

Wilder, Laura Ingalls. *Little House on the Prairie*. 1935. New York: Harper Trophy Book, Harper and Row, 1971.

2次資料

青木順子 『「虚構世界」と「現実世界」：「小説を読む」と「異文化コミュニケーションを学

- ぶ』 大学教育出版, 2007
- 石井敏・久米昭元編 『異文化コミュニケーション事典』 春風社, 2013
- シヨールズ, ジョセフ 鳥飼玖美子監修 長沼美香子訳 『深層文化： 異文化理解の真の課題とは何か』 大修館, 2013
- 高橋和子 『日本の英語教育における文学教材の可能性』 ひつじ書房, 2015
- 日本コミュニケーション学会編 『現代日本のコミュニケーション研究： 日本コミュニケーション学の足跡と展望』 三修社, 2011
- 吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子 『文学教材実践ハンドブック： 英語教育を活性化する』 英宝社, 2013

- Bennett, Milton N. Ed. *Basic Concepts of Intercultural Communication*. Second Edition. Yarmouth ME: Intercultural Press, 2013.
- Bruns, Cristina Vischer. *Why Literature?: The Value of Literary Reading and What It Means for Teaching*. New York: The Continuum International Publishing Company, 2011.
- Burwitz-Melzer, Eva. "Teaching Intercultural Communicative Competence through Literature." Byram, Michael., Nichols, Adam. & Stevens, David. Ed. *Developing Intercultural Competence in Practice*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd., 2001, 29-43.
- Byram, Michael. & Fleming, Michael. Ed. *Language Learning in Intercultural Perspective: Approaches through drama and ethnography*. Cambridge University Press, 1998.
- Spitzberg, Brian H. & Changnon, Gabrielle. "Conceptualizing Intercultural Competence." Deardorf, Darla K. Ed. *The Sage Handbook of Intercultural Competence*. Sage Publications, Inc., 2009. 2-52.